

魂の目撃者

鈴木比佐雄

葛原りょう詩集『魂の場所』に寄せて

独りの若者はなぜ詩人にしかなれなかったのか。そんなただならぬ宿命的な問いを抱かせる若者の詩篇がまとめて送られてきた。詩誌「衣」を始めたばかりの山本十四尾さんから二〇〇四年春頃だったと思う。その葛原りょうさんの詩は、家族や地域社会が崩壊した殺伐な世界に降り立った、繊細で心優しい若者の痛みのような肉声として届けられた。私がその年の秋にある集まりで彼と出会った時に、真っ先に感じたのは、二十代でH氏賞を受賞し、三十代で千篇余りの未発表詩篇を遺し自死した永塚幸司のように、詩を天職と感じている才能ある詩人だと直観した。永塚幸司のように繊細すぎて、社会的な適応能力が欠けている印象はあるが、違うところは、詩を愛する者たちへの畏敬する心や接するときの明るく振る舞おうとする他者への気遣いを感じられたことだ。私は才能を過信することなく、多くの詩人の中でも自己を見失わずに、本来の自己の課題を貫

いていつて欲しいと願っていた。

葛原さんは、一九七八年生まれだから、いま二九歳になる。詩人としては若い方だが、実生活では決して若くはない。私はこの三十歳前後の時期が、その後の人生を決定づける大きな転機だと思っている。葛原さんは才能だけで詩を書く時期から、二十代後半からもつと自覚的に自らの意志する所から詩を書き始めたのだと思う。二〇〇五年四月の「COALSACK」五一号で葛原さんの詩一三篇の小特集を組んだ。その中に今回の詩集の一章に収録された「不忍池」と「餓鬼」も収録されている。「餓鬼」を引用してみる。

餓鬼

餓鬼 を持っている

へいせい を充分に過ぎて

音もなくインスタントラーメンをすすする男には
スナック麺でこと足りる一日でしかない一日とい
う

痩せつぼちの餓鬼 になる

やめてくれ

やめてくれよう と 声が

明け方 ストン、と 朝刊が ぼくを悼む

カーテンをひく、と 太陽が ぼくを

焼却する

ふり向けば六畳間に 川が静かに流れている

お湯をください ぼくはインスタントだから

お湯をください 三分で、すぐに欲望 充たされ

ますから

豊かな飢餓だ

メルヘンのような

インスタントのカップ麺を素材にしながら、現代の若者の飢餓感をこのように表現し得る不思議な才能に驚かされた。いや若者に限定は出来ない現在人のインスタントな欲望への痛切な批判とも思える。

「お湯をください ぼくはインスタントだから」という一行のもつアイロニーが、現在人の存在の危機をあらわにしている。「豊かな飢餓」の光景をこの短詩で書き記したのだ。その意味で葛原さんは現代の都市文明の中で「飢餓」を書きうる新しいタイプの詩人として私の前に現れてきた。その後も葛原さんは「COALSACK」へ数篇ずつ寄稿を続けていて、五三号では新詩集の二章に収録された「冬の挽歌」が寄せられた。この詩も忘れがたい思いがする。

冬の挽歌

転がってゆくボールを追いかけて

友達がどんどん

見えなくなってしまうた

ふゆ

流れてきたのは

凍てついた枯葉だけれど

ぼくは確かに（街の岸辺をなでて）

澱んだ窪みに（人が来るのを待っていた）

花を貰ったことがある

一度だけ 生涯に

けれど 枯れてしまうのは

止められないじゃないか

たとえ 玄関に 人目につくよう

置いてみても けして開かない ドアだから

いまは

かわたれどきか

たそがれどきか

ぼくはぼくの体温にさえ

ただ 耐え難かった

冬の坂をくだる

光る二つの目玉も 見えなくなるまで

どこまでも くだってゆく

子供時代にひどいいじめ経験を持つ葛原さんにとって切実なテーマのひとつは、いじめの痛みを共

有する友情の成立した場所やそんな友情の喪失感ではないか。友人との熱い交流を想起することから、かろうじて現在の孤独な魂を救い出そうとしている。「転がってゆくボールを追いかけて／友達がどんどん／見えなくなってしまう」という出だしは象徴的だ。見えなくなった友達をいつまでも探し続けていて、夕暮れになってしまった。そして「光る二つの目玉も 見えなくなるまで」の暗闇の中でさえ探し続けているような一途さを感じさせる。彼が出会った友人達は、遠くに行ってしまったのに葛原さんは、その時の体温をいまも感じ続けているのかも知れない。人間不信を超えて、人間を信じようとする魂の交流の場所を葛原さんは「どこまでも くだってゆく」のだ。

葛原さんとの交流の中で最も印象的なことは、私も実行委員をしている二〇〇五年秋に開かれた第二回「鳴海英吉研究会」に参加して鳴海英吉の詩を二篇「れき死について」「流沙」を朗読したことだ。前年の二〇〇四年の第一回目の時は、武力也さんが鳴海英吉の代表作で横浜大空襲で亡くなった許婚を悼んだ「五月に死んだ ふさ子のために」を暗唱し

て、聞く者たちを感動させた。その朗読は、まず敬礼から始まりシベリヤから帰還した若き兵士の鳴海英吉の魂が乗り移ったかのように、鬼気迫る迫力があつた。しかし、あるうことかその年の冬に武力也さんは急死してしまった。葛原さんは武力也さんとも以前から朗読会をしていて親しい関係だったらしい。前年の武力也さんの朗読を聞いたかったと故人を悼むスピーチをして、とても心のこもったプロ並みの朗読だった。私を含め参加者の多くは武力也さんの良き後継者が出来たと感じ取ったのだった。

二〇〇五年暮れに第一詩集『朝のワーク』を出した後に、山本十四尾さんの「詩の教室」などで葛原さんは、会うたびに詩が書けないともらしていた。私は書けないときは、他者の詩をしっかりと読み込み、書評や詩論を書いた方がいいとか、無理に詩を書くべきではなく、実生活に向き合い、アルバイトではなく定職に就いた方がいいだとか、あたりまえのアドバイスを繰り返していた。なぜなら余りに詩を書きすぎるとエネルギーが全て詩作に奪われてしまつて、詩を書くために生きているという逆転した状態になる。日常の暮らしが根底から破壊されてしまう

恐れがある。カップ麺ばかりの生活をしていたら、詩「飢餓」のように自らの存在が、カップ麺と同等の存在にすり替わってしまうと思われた。実際に葛原さんはそうならないために生活を立て直そうと苦闘していた。

二〇〇六年の始めに葛原さんは資金援助をしてくれる人がいて、キューバ旅行をしてきた。詩が書けないといっても、実は旺盛に詩を書いていたのだ。しかし葛原さんにとっては、優れた詩が書けないということがだったのかも知れない。「COALSACK」五四号ではキューバ詩篇七篇を掲載した。その中から「ツネナガの像」を紹介したい。この作品は新詩集には収録されていない。

ツネナガの像

ローマ法王に会いにくいため

支倉常長はハバナに降りた

汐風の釣り人が

いくつも竿を並べていた

鎖国の日本に戻った常長は

毒殺されたとも

闇討ちされたとも伝えられているが

ハバナのツネナガは

相変わらず海の彼方を指差して

いつまでもカリブの太陽を浴びていた

わたしも日本に戻れば

殺されるのであろうか

たぶん 殺されるのであろう

黙殺されてゆく日々に

時計仕掛けの人たちに

わたしは

会いに行く人を持たなかった！

会いに来る人も持たなかった！

わたしの青空には

ただ ちぎれ雲だけが

むやみやたらに遊んでいた……

葛原さんは「巨大な風車になって」という詩では

を日本人が語ることは、日本人の良心が問われている多くの問題があると考えていた。高畑烈さんを招き、心ある日本の詩人に呼びかけて、シンポジウムを兼ねた出版記念会を開きたいと願っていたのだ。葛原さんもこの広島での出版記念会に参加してくれた。また「COALSACK」五五号に再録された五時間にわたる内容のテープ起こしも手伝ってくれた。そのような形で葛原さんは詩が書けないといえながら、コールサックの詩の運動に深くかわるようになっていった。秋の第三回「鳴海英吉研究会」にも参加して五篇の鳴海さんの詩も朗読してくれたのだ。五五号に掲載された詩「五時の夕食」は春先に入院した時の最も危機的な時期を詩に記したものであったかも知れない。

五時の夕食

ヒバリが鳴いた

ヒツと鳴いた

レター届いた

キューバのカストロ国家評議会議長やベネズエラのチャベス大統領の演説も聞き、民衆を担った指導者たちの熱気からその高揚を受け取ったが、この詩「ツネナガの像」では、日本へ帰国した時の黙殺される無力感に苛まれている。本人にとっては二〇〇六年が詩が書けないという焦燥感と悲壮感に満ちた袋小路に入りこんでしまった存在の危機であったのだろう。

私は二〇〇六年に「COALSACK」で一九九九年から七年間連載していた高畑烈『長詩リトルボーイ』を企画出版しようと考えていた。それを機にコールサック社を株式会社にし、私が企画編集した『浜田知章全詩集』や『鳴海英吉全詩集』などのような全詩集や、二〇〇五年に刊行した私の詩論『詩の降り注ぐ場所』（石炭袋新書）のような詩論集シリーズを構想していた。私は『長詩 リトルボーイ』の出版記念会を原爆祈念日前日に開くべく、原爆詩を精力的に書き継いでいる長津功三良さんに協力を仰いだ。日本は唯一の被爆国と言われているが、民衆レベルでは、何万人もの朝鮮半島の民衆が被爆している。これらの問題を抜きにして原爆

—— 那須高原温泉療養所宛

女の字ではあったが

全然、配慮の欠けた文字

外の車の振動を

受信して俺も時々鼻をかむ

畳にハサミムシが迷っているが

強そうなので ほうっておく ことにする

「お食事のしたくができました」

一斉アナウンスが俺を立たせる

患者それぞれのイタダキマスが

いたましい配慮の挨拶

俺もイタダキマスと言ひ

しみ豆腐に箸つけようか

味噌汁のキャベツにしようか

ウグイスが鳴き方を間違えた

みんな 笑った

葛原さんは詩作を突き詰め、精神の極限の体験をして心身を衰弱させ、入院した場所で人間存在の孤独さを超えて共同生活の中から、何かを掴み取っていたのだと思われる。その後、退院し広島での『長詩 リトルボーイ』出版記念会などを経て、葛原さんは秋に定期の仕事に就き働き始めたのだった。「ウグイスが鳴き方を間違えた／みんな 笑った」というさりげない詩行は、全てを受け入れるような自然体の心持ちになってきた。焦燥感や悲壮感から離れ、他者の苦しみを共感し得る何かを見出したように私には感じられた。二〇〇六年は詩が溢れるようにはかけなかったが、「五時の夕食」などの秀作を書くことが出来たのだ。

葛原さんは中学一年二年生の頃、いじめで不登校になった。当初は家に閉じこもっていたが、その後、障害児施設に通いボランティア活動を開始したという。その場所で障害者やそこで働くスタッフとの交流の輪に自然に入っていたという。最も苦しい時に人間同士が助け合うことの美徳を葛原さんは肌で分かっているのだ。葛原さんと接していると、謙虚でありながら萎縮しない、年齢を超えた人間的な親

しみを感じるときがあるのは、きつとそのような体験を中学時代からしていたからだろう。十七歳の時に農業高校を中退し葛原さんは埼玉県毛呂山町にある「新しき村」に入村した。そして二年半の間、農作業をしながら詩作を続けたという。その時知り合った同年齢の森田直樹とは「心友」となった。森田直樹は短期間で村を出て、埼玉大学哲学科を卒業したが二五歳で急死した。彼とは葛原さんが「新しき村」を出た後に同人誌『三等星』を創刊し、詩作を競い合った。絵が上手だった森田直樹の絵も紹介されていた。葛原さんにとって「新しき村」体験は農夫としての労働を体験し、文学・哲学・人生を語り合える友を得た大学のような場所だったかも知れない。葛原さんの第一詩集『朝のワーク』には、森田直樹を追悼する数篇の詩が収録されている。いじめ体験を共有しその苦悩を語り合えた森田直樹との友情を葛原さんは残すために、手作りの森田直樹詩集『あの空であえたら』を編集・製作もした。葛原さんは森田直樹の命を忘れずに、彼の魂と共に今も生きてるように私には感じられる。

機関誌「新しき村」一九九七年四月号に四篇の詩

が掲載されている。その中で次に引用する「灰色の家路」が心に残る。

家路が灰色一色に染まりました

灰色の家路

小さな子供は石を蹴る
 只々無心に石を蹴る
 何も考えずに 何も思わずに
 楽しくもなく つまらなくもなく
 冷たく、鈍く、黒光る
 足もとの小石だけをみつめて
 この子は小石と話してる
 この子の眼の云うことには
 人間社会がいやになりまして
 あなたと遊んでいきたいのです
 ぼくの本当の友達
 蹴られても何も云わないあなただけ
 聞こえるともなくため息が一つ
 ランドセルがカタカタ鳴っている
 小石もカタカタ転がりました
 わきのドブ川にポチャ

この詩「灰色の家路」を葛原さんは十八歳の時に「新しき村」で書いた。小石を蹴ることだけが救いであつたような子供時代を振り返ることによって、葛原さんは表現者としての一歩を踏み出した。学校と家とどちらも葛原さんにとって自分を生かす場所とは感じられなかったのだろう。最後に残されたのが家路であつたのだが、その家路も灰色に感じられるという。小学校低学年から喘息などがひどく不登校をしていた時期もあつたという少年は、小石と対話し、蹴られる小石にも自己の存在を仮託していた。そして生きることの困難さの中で聞こえてくる、存在者の「ため息」を大切なものだと感じていたのだ。葛原さんの感受性の鋭さは、子供時代の孤独な体験を通して、本当の人間の優しさや内面の強さへと転化させようとしているのかも知れない。

葛原りょう第二詩集『魂の場所』は五八篇が収録された。一五〇篇以上の中から選び抜かれたものだ。いま葛原さんは二十代後半になったのだが、彼の詩の特徴は決して若い感性だけでなく、若さを超

えた詩人本来の根源的な問いを、例えば生と死に關わる魂や、他者との関係性である愛を充分すぎるほど引き寄せて、書き記している。それほど葛原さんは書くことによつて、彼の置かれた苛酷な現実と対峙し乗り越えようとしてきた。その意味で彼ほど詩のミューズから呼ばれている詩人はまれではないか。葛原さんは溢れ出すような詩的発想があり、またそれを書く筆力も持ち合わせている。入院やいじめ体験から不登校になり、葛原さんが学校の勉強ではなく、障害者施設での交流や「新しき村」での労働体験など、また独学で古今東西の詩人・文学者たちの詩集・小説類を読破していることは、彼との会話から知ることができる。その行為は葛原さんがそれらが必要としていた存在だったから水を飲むように彼の肉体に吸収され血肉となつていったのだ。そのただ中で葛原さんにとつて自己の魂をいかに見詰め、他者の魂とどのように対話していくかが一貫したテーマなのだ。

Ⅲ章「鉱石」の詩「鉱石」は葛原さんにとつて特別の詩であるかも知れない。それはため息をもらす「蹴られる小石」でしかなかった少年が、一人の他

者との出会いを通して、自らを生きるべき価値ある「鉱石」として自覚し、その可能性を記した詩だからだ。長い詩なので後半の一部を引用してみる。

すべてがサヨナラの中

緑柱石の夢

ラピスラズリの歌

瑪瑙の愛を発掘しては

わたしという化合物との相性を

天秤にかけて世界を

顕微鏡越しに覗いていた

さりげない 小児こどものような眼で

この指に触れたのは土である屍で

そこから生えていた苔、羊歯、胞子、は

わたしの半身を もう覆っていた

切り離れたかったのは

わたしのそんな右手だった

発掘するとは 痛いことだ

ハンマーとタガネを持つ

打つ

くあん と鳴ってわたしが生まれる

空気にふれてわたしが変わる

はじめ わたしは愛だった

はじめ わたしは歌だった

打つ

くあん と鳴って あなたが生まれる

はじめ あなたも歌だった

人は このようにして削られてゆく

鳥が生まれて

重力が生まれたのだから

わたしが生まれたから

あなたが生まれたように

地球の鉱石のなかで

どんなに光り耀いても

まるで見えないくら闇の中で

互い互いの重力に怯えながら

暮らしながら

くあん

どこかで今日も

蒼い火花を散らせながら

この詩「鉱石」は間違いなく葛原さんの書き上げた新詩集の最も優れた作品だろう。蹴られ続けた「小石」であつた自分を「鉱石」に擬して、自ら「打つ」ことによつて、「くあん」という響きでもって他者と共に「わたしが生まれる」そして「あなたが生まれる」。「わたしは愛だった」と感じ、「わたしは歌だった」のであり、「あなたも歌だった」と音譜をふるように記していく。葛原さんにとつて二十歳代後半でこのような強い詩が書けたことが、この詩集をまとめる大きなモチベーションになつたのだろう。

葛原さんは、私と長津功三良さん、山本十四尾さんが二〇〇七年春から編集を開始した、『原爆詩一八一人集』の成立過程を近くで目撃していた。彼は私たちの目撃者でありながら当事者にもなつた。彼は新詩集にも入れた「出口はどこだ」と「ノーモア」を短時間で書き上げて参加してきた。二十歳代では唯一の詩人だった。『原爆詩一八一人集』には

「出口はどこだ」が収録された。この作品は八月四日の朝日新聞関西版社会面の記事「戦後世代の「ノーマア」 未体験でも語りたい」の冒頭近くに引用された。また同じ日のNHKラジオ「カルチャーアンドサイエンス ラジオあさいちばん」で『原爆詩一八一人集』が九分間特集された。その中で葛原さんは「出口はどこだ」を参加詩人の最年少詩人として朗読した。さらに九月十五日にも同番組で葛原さんだけの特集も組まれたのだった。その放送を聞いた詩を普段読まない多くの知人や関係者から、また身近な詩人たちの多くも葛原さんの詩集を読みたいという話を私は直接聞いた。そして私や長津功三良さん、山本十四尾さんは彼の詩集を世に出そうという企画編集案を固めていった。

葛原さんの詩はいじめで苦しんでいる多くの人々を勇気づけるだけでなく、心優しく真摯で友情に厚く生きようとしている若者たちの存在を知らしめるだろう。また詩を志す者たちにとってもこの溢れんばかりの詩作力は大きな刺激となるだろう。賢治や朔太郎や中也たちの高貴な詩的精神に近い「魂の場所」にいま葛原さんは立ち尽くしている。そんな

二十歳代の詩的精神の結晶である『魂の場所』を多くの時代の中で苦悩している人たちに読んで欲しいと願っている。